

中上級日本語学習者の視点表現の発達について

— 立場志向文を中心に —

大塚純子

要 旨

「視点」とは、叙述に際しての話し手の物理的・心理的な位置を指し、視点を示す表現を「視点表現」と言う。学習者の日本語の不自然さの原因のひとつとして視点表現の欠如をとりあげ、中上級日本語学習者の発話における視点表現としての立場志向文の発達を追った。縦断調査で、初期には視点表現が少ないが、期を追うに従って視点表現が発達すること、感情移入の対象である視点人物を固定化し話を進める傾向が強まり、視点の一貫性ルールが守られるようになること、視点人物に関する省略が増えていくことが観察された。本稿では、視点表現が省略を可能にする役割を担っていることを明らかにし、視点表現・視点の一貫化・省略の三者が関連して発達し、日本語の自然さを生みだしていく過程の解明を試みた。

【キーワード】 立場志向文、視点、視点の一貫性、視点人物、省略

1. はじめに

日本語学習者の話を聞いている時に、誤解とまではいかななくても話の流れを失って戸惑うことがある。例えば、「母がお金を送りました。」というので、第三者に送ったのだと思って聞いていると、話し手自身に送金してきたということであつたりする。「母が(私に)送りました」は、客観的すぎてどこか不自然な表現である。母の行為が話し手と関係なく離れたところでなされたという感を与える。話し手が叙述された行為に対し、どういう関係にあり、どういう立場にあるのかという情報がない。これを「送ってくれました。」とすると、「私に」という表現がなくても行為の向かう先が、話し手であることや話し手が母の行為を有難いと思っていることが同時に表示され、日本語として落ち着いた表現になる。

池上(1989)は、日本語という言語では対人的に中立であるような表現が如何

に困難であるかをしばしば思い知らされるとしている。英語の直訳である「ジョンはメアリにその手紙を読んだ」という文が日本語として落ち着かないのは、話し手が、どの位置から（誰の立場から）事態を捉らえているかという話し手の物理的、心理的位置付け、つまり視点の表示がないからであると述べている。

日本語学習者の話に、文法的な間違いはないのにどこか違和感を感じることはあるのは、このような話し手の立場を表わす視点表現が欠けているからではないかと考えた。学習者は日本語の学習が進むにつれて、言葉の背景にある「物事の捉らえ方」にも影響を受け、日本語に特有な視点表現を身につけていくのだろうか。また、視点表現が発達することにより、話に自然さがましてくるのであろうか。本研究の目的は縦断的な調査からこれらの点を明らかにすることである。まず、視点表現と立場志向文について説明する。

1-1 視点表現

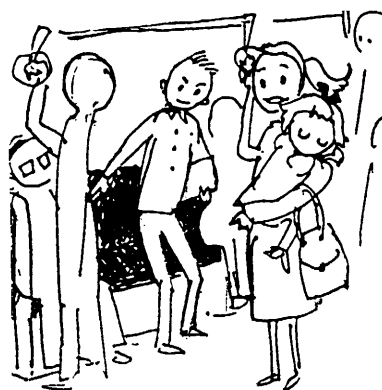
視点表現とは話し手の物理的、心理的、位置を示す表現のことである。例えば、右の絵の場面を説明するのに、事実を客観的に述べる「男の人が席を譲る。」という表現以外に、以下の3通りの言い方が可能である。

- (1) 男の人が席を譲ってあげる。
- (2) 女の人が席を譲ってもらう。
- (3) 男の人が席を譲ってくれる。

「譲ってあげる」の文は、話し手が与え手であ

る男の人の立場に身をおき、その気持ちになって、席を譲るという行為を捉らえた文である。「譲ってもらう」と「譲ってくれる」は、受け手である女の人の立場に立って述べたものである。3つの文には「席を譲る」という行為が女の人にとって恩恵であるという、話し手の価値判断が同時に表示されている。日本語母語話者は、この場面がある話の流れの中の一コマである場合、上記の3つの表現からどれかひとつを選んで使っている。つまり、行為者である与え手の男の人の立場に立つか、受け手である女の人の立場に立つかを選択するのである。このようにある出来事を述べる際に、話し手がどこに位置し、誰の気持ちになって事態を見ているかという、話し手の空間的、時間的、心理的な位置を意味するものを「視点」(澤田1993)と言う。これは松木(1992)のいう「話者がどこでみ

図1



るか」という『視座』と同一の概念である。心理的視点とは、話者の感情移入先であり、久野(1978)の視点概念である共感(empathy)の対象のことである。

例の(1)「譲ってあげる」の文では、話し手の視点は男の人寄りにあり、(2)と(3)では女の人寄りにある。「～てあげる、～てくれる、～てもらう」などの話し手の視点を示す表現を視点表現とよぶ。

1-2 立場志向文

水谷(1985)は、前述の「母がお金を送りました」のような話者の立場が見えない表現の不自然さを指摘し、日本語の話者の立場に基づく表現の傾向を明らかにした。次のような(a)英語話者にとっての自然な表現、(b)文法的に間違いはないが日本語としては不自然な表現、(c)日本語話者にとって自然な表現、の例をあげ、事態を話者の立場から表現する日本語の特徴を指摘している。

(a) Someone stepped on my foot.

(b) ?誰かが私の足を踏んだ。

(c) 足を踏まれた。

(a)の直訳である(b)の日本語は不自然である。自分の足が踏まれるという我が身に降り掛かった災難について、自分に関係のないひとごとの様な感じを与えるからである。このような表現に日本語話者は違和感を持つこと、さらに自分自身の身にふりかかったことは「我が事」として報じるべきだという考えが日本語話者の意識に存在していることを指摘している。話者が被害を受け強く関与している事態であるのに、中立的に事を述べている(b)の表現は、話者の視点の所在がみえない表現であり、日本人の耳には不自然に聞こえるのである。一方(c)は被害の受け手である話者を主語にとり、話者の立場から話をする表現である。このような「事実を叙述する際に話者の立場から動詞類を選ぶ表現」を「立場志向文」、(c)のように事実をそのまま叙述する表現を「事実志向文」と名付けている。立場志向の表現として、授受、受給表現、受け身、てくる／ていくなどの表現があげられている。

日本語では、自身が関与しない第三者の情報に関しても、話の中に登場する人物に感情移入し、その立場に立って立場志向文を用い、話者の視点が示される。立場志向文を、話し手の立場から物事を捉える話者中心性と、第三者の行為に対しても話し手の価値判断を付与する主観性の強さという二つの特徴をもつ日本語特有の視点表現と考え、学習者自身が直接登場しない第三者の情報に

ついて立場志向文がどのように表れるかを調査した。

2. 調査の概要

2.1 調査方法

せりふのない20コマ漫画の内容に沿って学習者に話を作ってもらい、録音、文字化した。ナレーションの収集は、1993年度のお茶の水女子大学大学院日本語文化専攻の学生による中上級日本語学習者を対象とする第2言語習得プロジェクトで行った。漫画は、人間文化研究科の棚橋・大島両氏の作であり同プロジェクトで使用させてもらったものである。

2.2 被調査者

縦断調査は、以下の中上級の日本語学習者3グループ計21名を対象に一定期間をおき3回行った。

1. 日研究生グループ :お茶の水女子大学の日本語日本文化研究生 8名
2. 学習者Aグループ:私立大別科日本語研修課程中級クラスの学生 8名
3. 学習者Bグループ:日本語学校の学生 5名

1.は、共同研究の対象者であり、2,3のグループについては筆者が別個に収集した。横断調査の被調査者は、日本語母語話(20名)、英語(7名)、韓国語(10名)、中国語母語話者(10名)の計47名である。

以上合計のべ 201のナレーションを収集し分析の対象とした。

2.3 調査期間

調査時期は以下の通りである。

1. 日研究生 1993年11月、1994年3月、7月
2. 学習者Aグループ 1994年 4月、7月、10月
3. 学習者Bグループ 1994年 4月、7月、10月

3. 結果と考察

3-1 立場志向文の発達

被調査者の3グループとも期を追って、ナレーションに表れる立場志向文の数が増えていき(表1)、動詞総数に対する出現率が日本語母語話者に近付いている(表2)。出現数の変化は下記の通りであるが、日研究生とBグループでⅢ期はⅠ期の1.5倍の出現率を示している。

表1：立場志向文〔ていく、てくる、(て)あげる、(て)もらう、(て)くれる、受け身、使役、てしまう*〕の出現総数の変化

	I 期	→	Ⅲ期
日研究生	46 表現 (8名の合計)	→	69 表現 (8名)
Aグループ	48 表現 (7名)	→	67 表現 (8名)
Bグループ	30 表現 (5名)	→	36 表現 (4名)
日本語母語話者	348 表現 (20名の合計)		

*水谷(1985)では「てしまう」について言及していないが、事態に対して話者の遺憾の意を表すという点で調査の対象とした。

主節に用いられた立場志向文の割合も3グループとも伸び、母語話者の平均出現率の7割にまで近付いてきている。話者が登場しない第三者の話において、単に事実を述べる表現から登場人物の誰かの立場に立つ表現ができるようになっていっている。

表2：主節における平均出現率

	I 期	→	Ⅲ期
日研究生	: 17.0% (28/165)	→	34.0% (57/168)
Aグループ	: 24.6% (31/126)	→	32.9% (47/143)
Bグループ	: 25.4% (18/71)	→	33.3% (20/60)
日本語母語話者	: 47.8% (194/406)		

【視点表現の習得の難易】

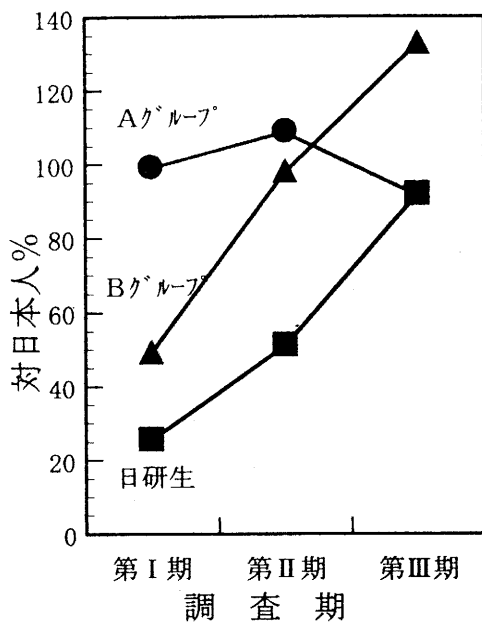
立場志向文に習得の難易が観察される。話者が文の主語または主題となっている人物（「Xは」、「Xが」で表されるX）の視点をとる表現は比較的早く習得され、それ以外の場合は習得が遅い。例えば、「足を踏まれた」のような受け身文では、文の主題（「Xは」のX）は省略されているが被害の受け手であり、話者の視点も被害の受け手側にある。このように話者の視点と文の主題が一致している表現は早い段階での習得が観察される。下のグラフ1～6は日本語母語話者のそれぞれの表現の平均使用率を100%として、学習者の平均使用率の推移を表わしたものである。I期、II期、III期と横に変化の様が示される。受け身は動作主ではなく動作の受け手を文の主題とする有標表現であるにも関わらず、話者が文の主題人物の視点をとるため、日研究生III期で対母語話者出現率は88.8%であり、他のグループも非常に高い出現率をみせている。

このことは、授受・受益構文の「(～て)あげる、/(～て)もらう」と「(～て)くれる」や、「～ていく」と「～てくる」の対比でさらに明らかになる。「(～て)あげる」は、話者の視点は、中立または、与え手である文の主題（「Xはあげる」のX）側にある。第Ⅰ期に日研生300%、AグループBグループとも100%以上と日本語母語話者の平均使用率をはるかに越えた、過剰な使用がみられるが、徐々に使用が減り、適切な場面で用いられるようになっていく。授受の場面では「あげる」がまず使われるという、非常に使い易い表現であることを示している。

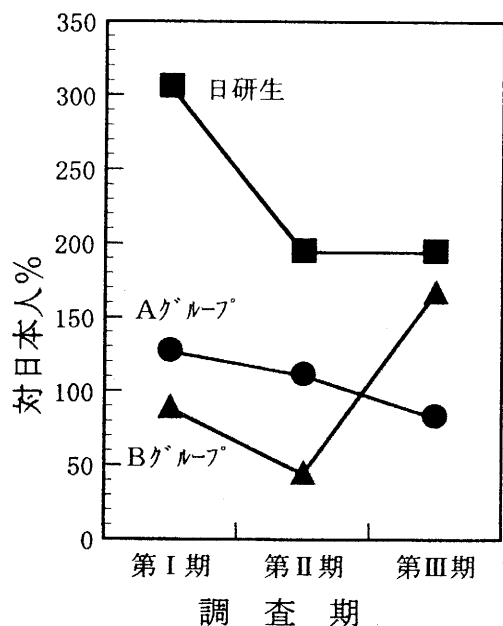
「(～て)もらう」も、話者の視点と、文の主題（「Xはもらう」のX）が一致している。やや過剰使用のグループもあるが、順調な習得状況を見せている。

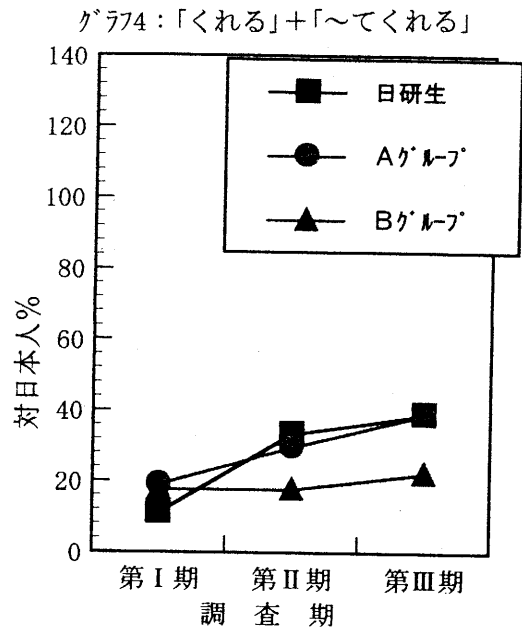
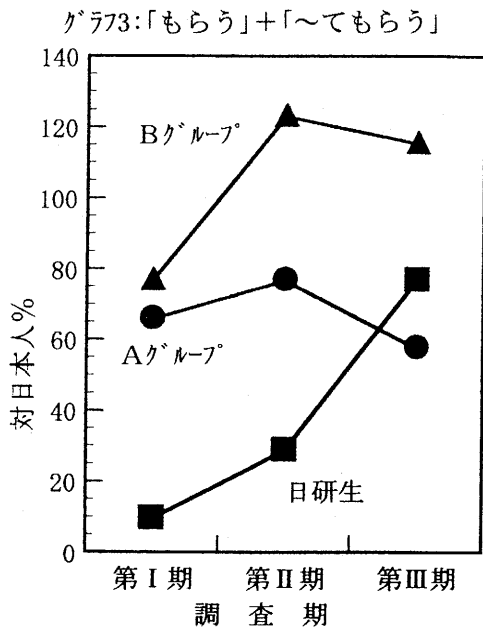
これに対し「(～て)くれる」は、文の主題は与え手であるが、話者の視点は受け手寄りであり、文の主題人物の視点を取らない表現である。出現率は上昇傾向はあるが、Ⅲ期でも平均32.6%と低い数値に留まっている。「あげる/もらう」に対し、使用が難しいことがわかる。

グラフ1：受け身の平均出現率

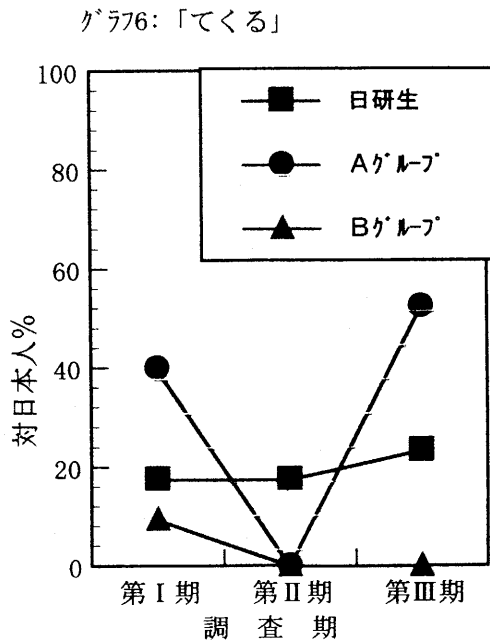
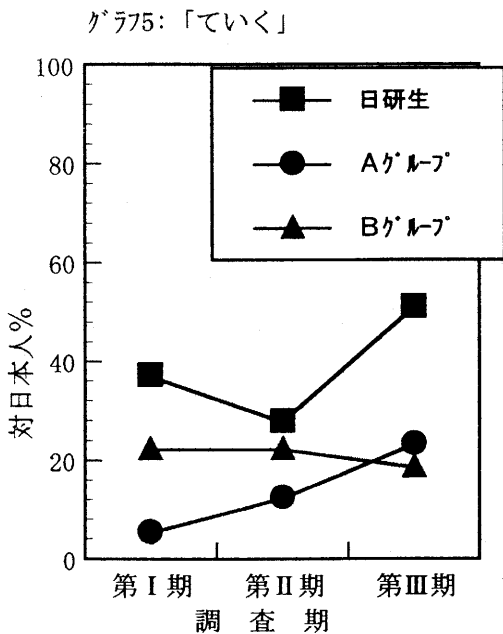


グラフ2：「あげる」+「～てあげる」





同様のことが「～ていく」と「～てくる」でも見られる。文の主題、「Xは/が」のXの視点をとる「ていく」が順調に発達しているのに対し、到達点側にたち、「X」が近づくのを待ち受ける視点をとる「～てくる」の出現率はAグループはII期で、BグループはII期とIII期で0%を示すなど出現が不安定である。



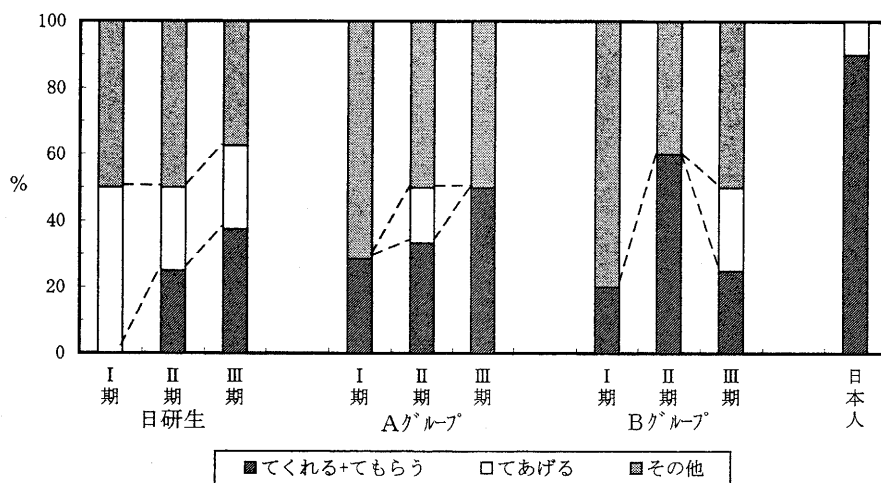
以上のことから、文の主題の視点をとる表現は習得しやすく、取らない表現の習得はなかなか進まないといえる。

3-2 視点の一貫性

前項で述べたように、「(～て) あげる」は初期の出現率が高く、日研生では母語話者の3倍の使用を見せ、文法的に誤りではないが、自然な日本語では用いられない場面にまで使われていた。しかし徐々に使用が減り、かわって「(～て) もらう」や「(～て) くれる」の使用が伸びていき、場面に適切な表現を選択できるようになっていった。グラフ7は、漫画の19コマを表現するのに用いられた表現の変化を示している。「あげる」から「もらう／くれる」への移行は、動作を行う人物側から事態を捉らえていたのが、受け手側に立った表現をわざわざ選んで使うようになったことを示している。

また、グラフ8は漫画の17コマにおける表現の変化であるが、日研生でI期では動作主の立場にたった「足を踏む」という表現が33.4%だったのが、III期では0%に減っている。一方、受け手側に立った「踏まれる」は16.7%から87.5%へと増えている。両者とも受け手になっているのは主人公である。学習者は期を追って主人公の視点に立った表現を選んで使うようになっていく。

グラフ7：19コマあげる→もらう／くれるへ



グラ78:17コマ 能動文→受け身へ

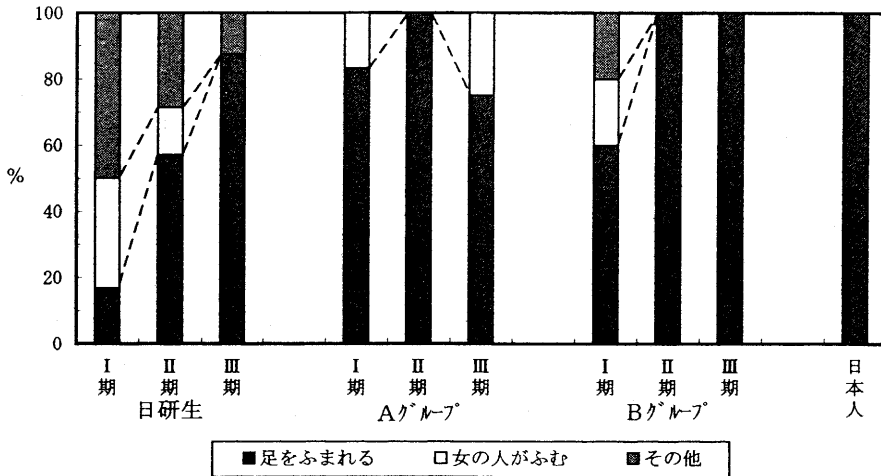


表3：視点の一貫化

	主人公視点	主人公グループ	非主人公視点表現
	総数	総数	視点表現総数
日本語母語話者	86.7%	96.8%	3.2%
日研究生	I期	64.9%	35.1%
	II期	73.5%	18.4%
	III期	84.6%	10.8%
Aグループ	I期	81.6%	6.1%
	II期	85.4%	4.9%
	III期	90.1%	3.0%

*主人公グループとは、漫画の中で主人公と行動を共にし、心理的にも主人公に近い主人公の母を加えたものである。

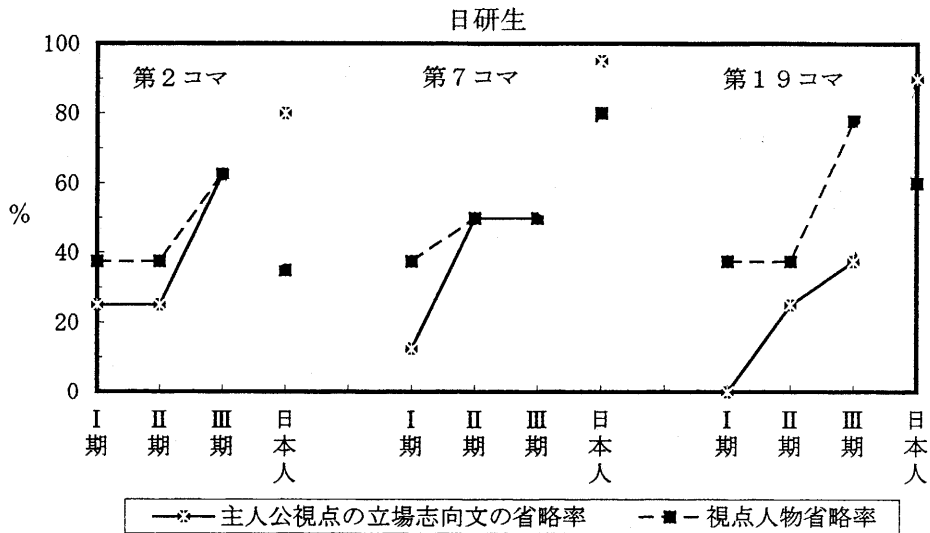
観察された立場志向文中、主人公の立場に立っているものの割合の変化を数値で示すと表3のようになる。主人公グループ寄りの視点は、日研究生でI期64.9%からIII期89.2%Aグループ97.0%とふえていっている。立場志向文の発達に伴い、話者の視点を突然変えるような不自然な表現が減り、主人公よりの一貫した視点で話ができるようになることがわかる。

久野(1978)は単一の文は共感度関係に論理的矛盾を含んではいけないとし、視点の一貫性の規則を提出した。神尾(1985)は視点理論が単一文だけでなく、談話の流れにおいても働くとし、視点の一貫性という性質は、談話が保たなければならない重要な原則であり、これに違反する談話はつながりに欠けた奇妙な感じを与えるとしている。物語文で焦点がおかれ、主題となる人物は主人公である。久野(1978)の談話主題のハイアラーキーに従うと、主題の人物寄りの視点はその他の人物に優先する。話者が特別に主人公以外の人物に共感を感じなければ、主人公寄りの視点が一番とられやすいことになる。鈴木(1988, p152)は、話者が共感を感じる対象の人物を「視点人物」とし、共感度操作による実験を行い「視点人物を移行させる標識がなければ、被験者は書き手によって提出された無標の視点人物を受入れ、その人物よりも視点の一貫した文を作り出す必要がある。その度合いが視点の一貫性原理を習得している割合を示す度合いとなる」としている。本調査では、ナレーション収録時に、「これは女の子の一日の話です」といって漫画を見せ、主人公である視点人物を予め提示した。学習者は、提出された視点人物を受入れ、「女の子」を主人公とした視点の一貫した文を作りだしていった。表3の結果は学習者の視点の一貫性の原理習得の度合いを示すものである。

3-3 視点人物（主人公）の省略

話者の視点が主人公に固定されれば、立場志向表現を用いた場合、話者の立場は主人公にあることが明白である。従って、受け身や「(~て)もらう」の主語、「くれる」の目的語、「~てくる」の到達点、「~ていく」の出発点側の人物はすべて主人公を意味し、わざわざ言及する必要がなくなる。漫画には授受の場面が3コマあり、いずれも主人公は受け手である。この3場面において、立場志向文が用いられた率と、その文において主人公である受け手が省略された率の推移を表したのがグラフ9である。以下のように、3場面すべてで立場志向文の使用率が高まるに伴い、主人公を表す表現が省略される率も上昇している。

グラフ9: 主人公視点の立場志向文と主人公省略の発達



4. まとめ

上記の結果をまとめると、視点表現の習得プロセスは以下の様になる。

- 1) 話者が直接関与する情報では、話者の立場から事態を叙述する立場志向文が使えるようになる。
- 2) 話者が直接関与しない情報では、視点移行（大江, 1975）とよばれる感情移入を通じ、登場人物の誰かの立場に立った立場志向文が使えるようになる。
- 3) 話者は、感情移入する人物（視点人物）を一定するようになる。
変更を示す標識なしに視点人物を変えることをせず、視点の一貫性ルールが守られる。
- 4) 立場志向文が使えるようになるに従い、視点人物を示す省略も増える。

視点表現とは、話者の心理的物理的位置付けであり、同時に外界を話者に位置付けるものである。話者と他の存在物との関係を聞き手に示し、話の世界を構成する視点表現は、事象を話者に関係づける標識であるといえる。この標識がないと、聞き手にとって話に登場する事物の関係がつかめず、ばらばらに存在することになるので、視点表現をもたない発話は、つながりに欠けた不自然

なものに聞こえる。事象の位置付けは、話者を中心に行われるのであるから、話の途中で変更を示すサインなしに、話者の位置を変えると、聞き手は構成された世界が崩れ、話がわからなくなってしまう。これが、前ぶれなく視点の変更をすることが抑制されている視点一貫化の理由であると考え。

話者の位置を示す視点表現があれば、話者または視点人物について言及する必要はなくなってくる。視点表現は省略を支える手段として機能している。

立場志向文を中心に視点表現の発達を追跡し、視点表現が聞き手の視線の方向付けを通し省略表現を可能にする役割の一端を担っていることを示し、発話の自然さへと導いていく過程を考察した。今後は省略に焦点をおき、母語話者と学習者の発話にみられる省略を支える手段、主題の明示、非明示現象について研究をすすめたい。

〈参考文献〉

- (1) 池上嘉彦(1989)「Ⅶ日本語表現論」『日本文法小事典』 大修館
- (2) 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』 ひつじ書房
- (3) 松木正恵(1993)「文末表現と視点」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』
- (4) 久野 暲 (1978)『談話の文法』大修館
- (5) 水谷信子(1985)『日英比較 話ことばの文法』くろしお出版
- (6) 神尾昭雄(1985)「談話における視点」『日本語学』 vol.4 明治書院
- (7) 鈴木情一(1988)「視点の言語心理的研究—共感度操作によるダイクシス再編成の喚起」『読書科学』第4号
- (8) 大江三郎(1975)『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻)